

Acquisition of the English Article System by Japanese learners of ESL

A comparison of speaking and writing performances

中西美佳(豊田高専非常勤講師)

1. はじめに

第二言語習得の領域において、屈折形態論の変異性は、注目されている研究の1つであり、主に、2つの解釈が研究者の中でなされている。

1つ目は The Missing Surface Inflection Hypothesis で、L2 学習者は、機能範疇を無意識に知識として持っているが産出する際に、何らかの理由でうまく産出されず、写像問題(mapping problem)が起こる。Prévost and White (2000) は自然産出を L2 学習者に行いその結果、写像問題の原因を処理段階の理由やコミュニケーションプレッシャーと述べている。White (forthcoming) は、屈折形態論について、L2 学習者にインタビュータスク を用いて実験を行った。その結果、冠詞について能力はもっているがそれを産出する際に、うまく産出されず、写像問題が起こるといふ見解を示した。

2つ目は The Impaired Representation Hypothesis である。Meisel (1997) や Enbunk (1993,1994) は、L2の屈折は機能範疇や素性の不足から起こり、欠陥しているのだと主張している。

2. 目的

英語の冠詞習得は、英語学習者にとって複雑、かつ難しいとされ、また、英語を長年学習してきた上級者でさえ、完全な冠詞の習得はなかなかできないと言われている。さらに、日本人の英語学習者にとっては、日本語に英語のような冠詞のシステムがないために、冠詞習得はかなり難しいと言われている。また、学校の授業で冠詞については、体系的に学ばれてきていないということも、冠詞習得の困難さを招くのであろう。

では、日本人の英語学習者にとって英語の冠詞をうまく使いこなせない原因は、英語の冠詞システムが、学習者の中に備わっていないのからなのか、それとも存在しているが、うまく産出することができないのかという疑問を上記の2つの説を基に研究する。

3. 冠詞

Howkins (2001) は冠詞と名詞タイプの共起を以下のようにまとめている。

Co-occurrence of the articles and types of nouns

Article	Noun types	Examples
the	N [+count, +singular] [+count, -singular] [-count, +mass] [-count, -mass]	the rabbit the rabbits the porridge the truth
a	N [+count, +singular] [-count, -mass]	a rabbit a (home) truth
∅	N [+count, -singular] [-count, +mass] [-count, -mass]	∅ rabbits ∅ porridge ∅ truth

(Hawkins 2001:233)

さらに、Howkins (2001) は冠詞を含んだ NP (名詞句)が特定のことを言及するかどうか [±specific reference] と、冠詞を含んだ NP が、聞き手にすでに知られているかどうか [± hearer knowledge] を基に、冠詞の特徴をまとめ、[±count] [±singular] [±mass] のような名詞の特性によって決められる共起可能な冠詞とNPが[±specific reference]、[± hearer knowledge] かどうかという間には複雑な相互作用があるとしている。

Interpretation of English articles on the basis of features: [±specific referent] and [±hearer knowledge]

	+SR	-SR
+HK	She had the baby at home Goldilocks ate the porridge She presented the evidence	The rabbit is a nuisance A rabbit is a nuisance ∅ Rabbits are a nuisance ∅ Theories must always be supported by ∅ evidence
-HK	I have a contact I have ∅ contacts They reached an understanding She presented ∅ evidence	She hopes to have a baby She wants to write ∅ books

Hawkins (2001:235)

4.1 1 回目の実験

日本人の英語学習者 8 人に、冠詞が習得されているかどうか調べるために、文法性判断タスク

(資料参照)を実行した。また、学習者が抽象的なレベルの冠詞システムを持っていると仮定し、それがうまく表層に出てこない原因、mapping problem とは何かを調べるために、ライティングタスク(資料参照)、スピーキングタスクを実行した。

4.2 結果

Accuracy in grammaticality judgment task

	The number of questions	Accuracy (percentage)
[+SR, -HK]	4	9/22 40%
[+SR, +HK]	2	1/11 9%
[-SR, -HK]	3	10/16 62%

Accuracy in the speaking task

	a		the		∅	
the contexts	4/96	4%	83/96	86%	9/96	9%
a contexts	16/29	55%	12/29	41%	1/29	3%
∅ contexts	0/0		0/0		1/1	100%

Accuracy in the writing task

	a		the		∅	
the contexts	3/102	2%	98/102	96%	1/102	0.9%
a contexts	31/42	73%	11/42	26%	0/0	
∅ contexts	0/0		0/0		8/8	100%

4.3 考察

文法性判断タスクで高い正解率を示すことができず、両方の説を支持できない。文法性判断タスクに、いくつかの問題点が見つかり、学習者の冠詞能力を十分に発揮できるタスクであったか疑問点が残り、再実験を行うこととした。

冠詞の使用の正確さは、ライティングタスク、スピーキングタスクとも *a* は *the* より使用頻度は少ないが正確に使われ、*the* は *a* よりも使用頻度は高いが過度に一般化される。また、ライティングタスクの方がスピーキングタスクよりも正確さは高い。

5.1 2回目の実験

日本人英語学習者13人に、1回目の実験同様、文法性判断タスク(資料参照)、ライティングタスク、スピーキングタスクを実行した。文法性タスクは5つのエラータイプ、共起エラー(* This is a my book.)、語順エラー(* This is new a book.)、忘却エラー(* He is ∅ brave man.)、濫用エラー

(* I'm going to go the shopping.)、誤用エラー(* A san becomes red.)を基に水野(2000)が作成したタスクを用いた。

5.2 結果

Accuracy in grammaticality judgment task

	共起エラー	語順エラー	忘却エラー	濫用エラー	誤用エラー
total	149/156 95%	150/156 96%	185/221 83%	201/234 85%	188/234 80%

Accuracy in the speaking task

	a	the	∅
the contexts	8/157 5%	140/157 89%	9/157 5%
a contexts	41/63 65%	21/63 33%	1/63 1%
∅ contexts	0/0	3/10 30%	7/10 70%

Accuracy in the writing task

	a	the	∅
the contexts	3/186 1%	181/186 97%	2/186 1%
a contexts	61/73 83%	12/73 16%	0/73 0%
∅ contexts	0/0	0/0	5/5 100%

5.3 考察

文法性判断タスクにおいて、1回目の実験に比べて、高い正解率を示した。しかし、特に3つのエラー、忘却エラー、濫用エラー、誤用エラーは水野(2000)がなかなか消えないエラーと指摘するように80%の正解率しかなかった。この結果から、英語の冠詞システム能力が完全には備わっているとは言えず、Missing Surface Inflection Hypothesisを支持することはできなかった。また、5つのエラーの正解率が80%以上であるということを考えると、冠詞システムが、完全に欠陥しているとも考えにくく、The Impairment Representation Hypothesisを支持することもできない。

1回目と2回目の実験を通して、冠詞システムが100%備わっているか、100%備わっていないかに注目するのではなく、ある部分の冠詞はすでに備わっていて、ある部分の冠詞は発達段階であると、中間言語に注目して細かく分析していくことが必要であると思われる。

また、冠詞の使用について、文法性判断タスクとライティング、スピーキングタスクにおいて、よく似た傾向を示した。実験参加者たちは、*the*を過度に一般化する傾向があり、また*a*を正確に使う傾向を示す。スピーキングタスクでは忘却エラー、濫用エラー、誤用エラーを行い、ライティングタ

スクでは、忘却エラー、誤用エラーを行う。文法性判断タスクでもこの3つのエラーの正解率が低いことから、実験参加者は忘却エラー、濫用エラー、誤用エラーを主にすると特徴づけることができるであろう。すなわち、実験参加者の冠詞習得レベルは、忘却エラー、濫用エラー、誤用エラーが発達段階であり、縦断的研究を行うことにより、どのような段階を踏んで習得されていくかに注目することができるであろう。

ライティングタスクとスピーキングタスクを比べるとライティングタスクの方が正解率は高い。このことから、スピーキングタスクのとき、コミュニケーションプレッシャーをより感じると思われる。しかし、ライティングタスクの結果から、ライティングタスクにおいても mapping problem が起こっている可能性も否定できない。また発達段階である冠詞システムが、ライティングタスクの結果を招いただけであり、実験参加者が現段階で持っている冠詞システムの能力がすべて発揮されている可能性もある。

6.課題

1つ目に学習者の冠詞能力を十分に発揮できる文法性判断タスクを作成することである。1回目の実験では問題作成を自分で行い、冠詞について問われていると気がつく実験参加者がほとんどいなかったし、使われている名詞のタイプが難しかった。それに対し、2回目の実験では冠詞の問題であると気がつく実験参加者が多かったし、比較的簡単な名詞が使われていた。これらの条件を統一して、かつ妥当性、信頼性のあるタスクを用いる必要がある。

2つ目に、スピーキングとライティングにおけるプロセスの違いを追究していく必要がある。もし、ライティングにおいても mapping problem が起こるとするならば、ライティングとスピーキングの絵を見て、言語を産出するまでのプロセスを知ること、mapping problem の要因を解明していくことができるであろう。

参考文献

- Enbunk, L.(1993/1994): On the transfer of parametric values in L2 development. *Language Acquisition 3: 183-208*
- Hawkins, R. (2001): *Second Language Syntax: A generative introduction*. Malden, Mass.: Blackwell.
- Meisel, J. (1997): The acquisition of the syntax of negation in French and German. *Second Language Research 13: 227-263*.
- Prévost, P. & L. White. (2000): Missing surface inflection or impairment in second language acquisition? Evidence from tense and agreement. *Second language Research 16: 103-133*
- White, L. (forthcoming): Fossilization in steady state L2 grammars: Implications of persistent problems with inflectional morphology. Unpublished, McGill University.
- 水野光晴 (2000) 『中間言語分析 英語冠詞習得の軌跡』 開拓社

1 回目の文法性判断タスク

When I was the eight-year-old girl, I am taken for my first music lesson. Ms. Grodzinska, teacher, was a plain, elderly woman and her apartment were thick with the dust. But in the corner stood magnificent grand piano, and when Ms. Grodzinska sat down to play a simple melody for me, I amazed to hear such beauty came from under her fingers. As she plays, she altered from a plain women to someone whose movements were as harmonious as sounds she was creating. I knew at once that I want to be able to bring forth sounds like that.....

2 回目の文法性判断タスク

語順配列テスト

She often carries on her a sister her back.

多肢選択クローズテスト

_____ children often give their mother small presents.

(These The A Ø)

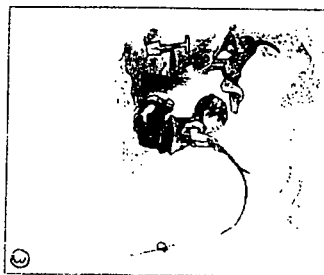
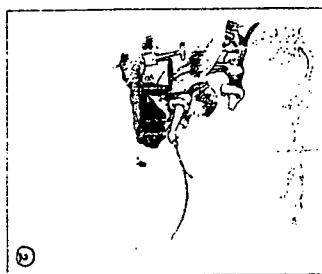
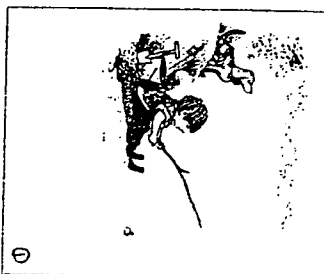
正誤テスト

リンダは教室の中を指差して言う。

“These is a my book on the chair.”

Appendix 5

The writing task



Mayer, M. & M. Mayer. (1971): *A boy, a dog, a frog and a friend*. Penguin. USA.